

平成 22 年度臨床教育実習(大学施設実習)前後における学生の自己評価

網谷 綾香*

1. 「実習生の自己評価チェックリスト」について

平成 22 年度の臨床教育実習（大学施設実習）では、昨年度と同様に「実習生の自己評価チェックリスト」（巻末資料を参照）を用いて学生に自己評価させた。

本チェックリストは、「基本的知識（15 項目）」「アセスメント（9 項目）」「指導・支援方法の自己学習（4 項目）」「個別の指導計画の作成(3 項目)」「対応力・指導力(7 項目)」「教育的姿勢（3 項目）」「連携力（16 項目）」「自己内省力・自己成長力(7 項目)」「倫理(3 項目)」の 9 観点、合計 68 項目から構成されるチェックリストである。評価は、「1.できない」から「5.できる」までの 5 段階に設定している。また、なぜ学生がそのような自己評価をしたのか把握するために、「自己評価の理由等」を記入する自由記述欄も設けている。詳細については平成 21 年度発行の「子どもの発達と支援研究」を参照されたい。なお、平成 21 年度は 6 段階評定だったが、今年度は 5 段階評定で実施した。

学生が自己評価を行うのは、実習前（10 月）、大学施設実習終了時（1 月）、学校実習終了時（7 月）の 3 回である。

2. 平成 22 年度臨床教育実習（大学施設実習）前後における自己評価の変化

ここでは、平成 22 年度後期に臨床教育実習（大学施設実習）を履修した学生の、実習前後の自己評価とその変化について報告する。

学部 3 年生 17 名、大学院生 6 名がチェックリストを用いて自己評価を行った。大学院生 6 名のうち、3 名は学部で臨床教育実習に参加した経験があり、残りの 3 名は現職教員であった。実施時期は、大学施設実習前（10 月）と大学施設実習後（2 月）の 2 回である。この自己評価データについて、9 つの観点別に平均値を算出した。図 1～2 は、実習前後における各観点の自己評価得点の平均値を示したものである。図 1 は学部 3 年生の、図 2 は大学院生の結果である。

図 1～2 より、ほとんどの観点において実習前に比べ実習後の自己評価得点が上がっていることが確認された。より詳細にみると、学部 3 年生については、「個別の指導計画の作成」「対応力・指導力」「教育的姿勢」「連携力」「自己内省力・自己成長力」「倫理」における実習後の伸びが大きい。一方、「基本的知識」「アセスメント」「指導・支援方法の自己学習」の 3 観点については、実習前よりも自己評価得点が上がっているものの、その変化は小さい。

大学院生については、学部生と比較して、実習前の自己評価得点が全般的に高かった。その分、実習後の伸び幅は小さいが、「対応力・指導力」以外のほとんどの観点において実習後に自己評価が高くなっていることが確認された。

* 佐賀大学文化教育学部附属教育実践総合センター

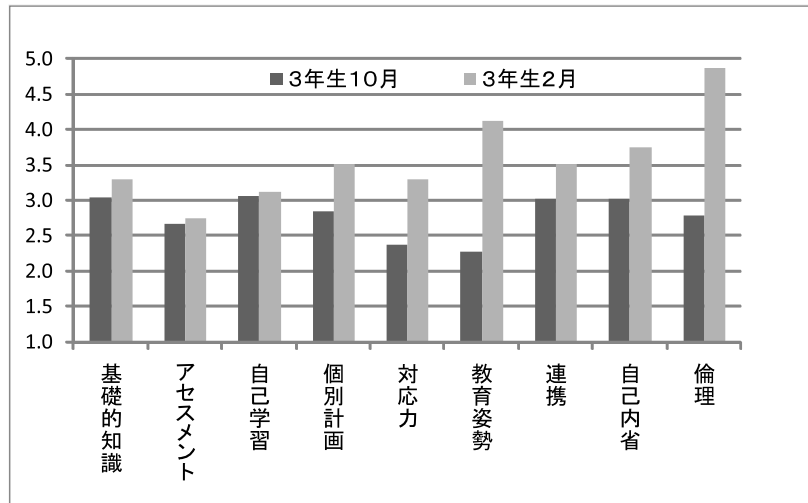


図1 観点別にみた自己評価平均値(学部3年生)

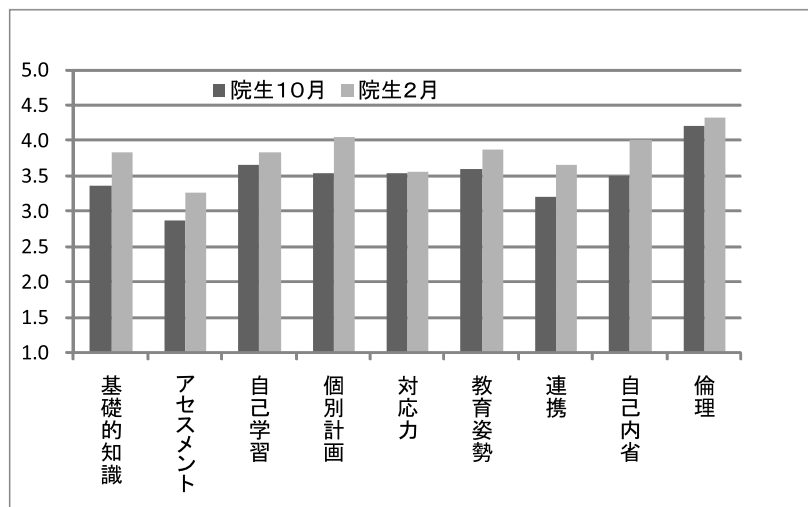


図2 観点別にみた自己評価平均値(大学院生)

3. 今後の課題

学部生、大学院生ともに、他の観点に比べ「アセスメント」についての自己評価が低い。K-ABCやバウムテストなど、チームによっては実施していない心理検査の項目が含まれていることも一因ではあるが、今後はアセスメントに関する基本的考え方や知識に加え、実際のスキルについてもさらに強化して教えていく必要がある。「基礎的知識」については、臨床教育実習の期間中に学ぶというよりもむしろ、実習前の段階でしっかりと身につけさせておくべきであろう。教育カリキュラムをさらに洗練させ、必要な基礎的知識をもりこんだテキスト等を提示するなどして、対応していく必要がある。

自由記述欄に書かれた学生の内省からは、知識の広がりや理解の深まりを実感して自信をつけた者もいれば、支援の難しさに直面し、自分の技術の未熟さや考えの浅さを痛感した者もいた。実習生を指導する教員は、こうした学生の質的・量的な自己評価を理解した上で、個々人のさらなる成長を促すような関わりをしていかななくてはならないだろう。